ねん ついたち
2020年3月1日
しじゅんせつだい しゅじつ
四旬節第一主日
きくち いさおだいしきょう せつきょう
菊地 功 大司教 ミサ説教

ことし しじゅんせつ けいけん しじゅんせつ
今年の四旬節は、これまで経験したことがない四旬節となつてしま
しんがた かんせんかくだい ゆる
いました。新型コロナウイルスの感染拡大をなるべく緩やかなものとする
にしゅうかん もっと じゅうよう きかん せんもんかかいぎ
ために、この二週間ほどが最も重要な期間であるという専門家会議
けんかい う しゅじつ きかん かぎ ひこうかい き
の見解を受けて、主日のミサをその期間に限って非公開とすることを決
めました。

ちゅうし ことば ひとりある きょうくきょうどうたい
ミサの中止という言葉が一人歩きしていますが、教区共同体という
してん み つづ ちゅうし こうかい
視点から見れば、ミサは続けられています。中止とされているのは公開
しさい しゅじつ つと きょう ささ
のミサですが、司祭は主日の務めとして今日もミサを捧げており、そのミ
しんじゃ れっせき かんしゃ さいぎ こうい
サは、たとえ「信者が列席できなくても、感謝の祭儀はキリストの行為
きょうかい こうい きょうどうたい おおやけ
であり、教会の行為」として、共同体の公のミサであります。

かんしゃ さいぎ きょうてきせいかつぜんたい げんせん ちょうてん
とはいえ、感謝の祭儀は「キリスト教的な生活全体の源泉であり頂
せいたい しゅうかい からだ やしな
点」でありますし、「聖体の集会においてキリストの体によって養われ
もの もっと しんせい しんぴ てきせつ しめ みごと じつげん かみ たみ
た者は、この最も神聖な神秘が適切に示し、見事に実現する神の民
いっち ぐたいてき あらわ だいに こうかいぎ きょうかいけんしょう する
の一致を具体的に表す」と、第二バチカン公会議の教会憲章に記
せいたい はいりょう
されていますから、ミサにあずかることと、聖体を拝領することは、わた
しんこうせいかつ か じゅうよう
したちの信仰生活にとって欠くべからざる重要なことでもあります。

いみ げんざい じょうきょう
その意味で、現在のような状況は、あつてはならないことでもあります。
みち かんせん さ あいだ あつ
未知のウイルスからの感染を避けるために、わたしたちはしばらくの間、集
と けつ きょうどうたい かいさん
まることを止めているのですが、それは決して共同体を解散したという
いみ え じょうきょう なか あつ え
意味ではありません。やむを得ない状況の中で集まり得ないときにも、
きょうどうたい そんぞく しゅ ひ いの ささ ぎむ しょうしつ
共同体は存続し、ともに主の日に祈りを捧げる義務は消失していま

せん。

また教会の伝統は、聖体拝領を通じてキリストとの内的な一致を
めざすために、秘跡を通じた拝領と、霊的な拝領の二つがあること
も教えています。

こうやって映像を通じてともに祈りを捧げるとき、またそれぞれの家庭で
祈りを捧げるとき、それはひとり個人の信心業なのではなく、キリスト
者の共同体のきずなのうちにある祈りであり、その祈りのうちにあつて、
ぜひキリストとの一致を求めて、霊的に聖体を拝領していただければ
と思います。

この不幸な状況は、同時に、わたしたちに様々な信仰における挑戦
を突きつけております。ちょうど主イエスが、その公生活を始めるにあたり
40日の試練を受けられたように、わたしたちもいま、復活の喜びに向
けて心を整える40日間にあつて、大きな試練に直面しております。

先ほど朗読された福音によれば、40日の試練の中で、イエスは三つの大
きな誘惑を受けておられます。

まず空腹を覚えた時に、石をパンにせよとの誘惑。次にすべての権力
と繁栄を手にする事への誘惑。そして神への挑戦の誘惑。この三つ
の誘惑が記されています。

第一に、人間の本能的な欲望や安楽にとどまることへの願望。第二
に、権力や繁栄という利己的な欲望。第三に、人間こそこの世の支配
者であるという思い上がり。

あくま ゆうわく いったい かみ はな ほうこう
悪魔からの誘惑とは一体どういうことか。それは、神から離れる方向
ひと ひと ふ ちから ゆうわく
へと人をいざなう、さまざまな負の力のことでしょう。そういう誘惑は
ふ じつ そと
どこからか降りかかってくるのかといえ、実は、外からやってくるもので
おお けっきょく ひとり ところ なか
はない。その多くは、結局のところ、わたしたち一人ひとりの心の中
う だ ところ はんえい おも
から生み出されている。わたしたちの心の反映であるように思います。

ちよくめん しれん
わたしたちがいま直面している試練はどうでしょう。

とうきょう ささ きょうこう
東京ドームでミサを捧げられた教皇フランシスコは、「わたしたちは、
まも の
すべてのいのちを守り、あかしするよう招かれています」と述べて、わたし
してん じぶん たしゃ うつ かがや きよしよく
たちが視点を、自分から他者へ移すようにと、むなしく輝く虚飾のシ
だま う やぶ そと でむ よ
ャボン玉を打ち破って外へ出向くようにと呼びかけられました。

うえ きょうこう ひつよう ちえ ゆうき む
その上で教皇は、そのために必要なことは、「知恵と勇気をもって、無
しょうせい おも かんたい みみ かたむ しせい とくちよう
償性と思いやり、寛大さとすなおに耳を傾ける姿勢、それらに特徴
じっさい もくぜん ほうよう う
づけられるあかしです。それは、実際に目前にあるいのちを、抱擁し、受
い たいど してき
け入れる態度です」と指摘されました。

えたい し かんせんしょう まんえん げんざい かんせん
得体の知れないウイルスによる感染症が蔓延しつつある現在、感染の
じじつ はっしょう じつたい め み どあ つよ こんかい
事実や発症の実態が目に見えない度合いがとても強い今回のコロナウ
かんせんかくだい ぎしんあんき
イルスの感染拡大ですが、そのためにどうしてもわたしたちは疑心暗鬼の
くらやみ なか と こ きぶん
暗闇の中に閉じ込められたような気分になってしまいます。

たし しんちょう かんせんたいさく おこな ひとり み まも こうどう ふ
確かに慎重な感染対策を行って、一人ひとりの身を守る行動は不
かけつ じっさいきょうかい どうじ
可欠ですし、実際教会はいまそうしているわけですが、それが同時にわ
ひとり ところ うち ぼうぎよ かべ きず あ けっか
たしたち一人ひとりの心の内にも防御の「壁」を築き上げる結果にな
っていないのでしょうか。

こころ まも しせい ぼうぎょ かべ けんご
心 が守りの姿勢になるとき、どうしてもその防御の「壁」はより堅固な
じぶん ちゅうしん こころ うご
ものになり、自分を中心にした心の動きに、とらわれてしまいがち
あくま ゆうわく
になります。それこそ悪魔の誘惑であります。

きょうこう ちえ ゆうき こうどう よ
教皇は、「知恵と勇気をもって」行動せよと呼びかけます。

きょうこう むしょうせい おも かんだい みみ かたむ しせい
教皇は、「無償性と思いやり、寛大さとすなおに耳を傾ける姿勢」
まも しせい あか よ
をもって、いのちを守る姿勢を証しせよと呼びかけます。

きょうこう じっさい もくぜん ほうよう う い たいど ひつよう
教皇は、「実際に目前にあるいのちを、抱擁し、受け入れる態度」が必要
よ
だと呼びかけます。

ねん しんがた まんえん にほん しきょうだん ぶらく
2009年に新型インフルエンザが蔓延したとき、日本の司教団の部落
さべつじんけんい いんかい ほっぴょう つぎ してき
差別人権委員会はメッセージを発表して、次のように指摘してしま
た。

かんせんげん はっそう かんせんしゃさが そそ
「「感染源」という発想から感染者探しにエネルギーを注ぐと、たくさ
ようぎしゃ つく だ きけん かんせんしょうたいさく
んの「容疑者」を作り出していく危険があります。・・・感染症対策
な しゃかいぼうえいさく ぎん ひとびと あいだ
という名で社会防衛策がとられると、菌やウイルスよりも人々の間に
ふあん きょうふ でんぼ へんけん さべつ しゃかい なか じょうせい きけん
不安や恐怖が伝播して偏見や差別を社会の中で醸成していく危険
があります」

あくま ゆうわく くつ きず あ こころ ぼうぎょ
これもわたしたちが悪魔の誘惑に屈して築き上げてしまう心の防御の
かべ ぎょう
「壁」のなせる業であります。

からだ けんこう まも ぼうぎょへき ひつよう
わたしたちは体の健康を守るための防御壁を必要としていますが、そ
かべ こころ なか ぼうぎょ かべ きず あ こころ
の壁が、心の中にまで防御の「壁」を築き上げないように心したい
おも
と思えます。

ひと い ことば ひつようせい ひてい
「人はパンだけで生きるものではない」という言葉は、パンの必要性を否定
じゅうよう
をしてはいません。しかしイエスは、それよりも重要なものがあるのだと
かみ くち で ひと ひと ことば い の
して、「神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」と述べられています。

ひと じぶん まも ひつよう いじょう かみ
人は、自分のいのちを守るためにパンを必要とするが、それ以上に、神
ことば まも かみ ひとり おも
の言葉、すなわちすべてのいのちを守るための神の一人ひとりへの思いが
じつげん ひと い
実現することこそが、人を生かすのだ。

たしゃ おも ところ たん にんげん やさ もと
他者への思いやりの心は、単なる人間としての優しさに基づいている
かみ ことば じつげん しんこう かくしん もと
のではなく、神の言葉を実現させたいという信仰における確信に基づい
かくしん かみ じしん たいせつ おも
ています。その確信は、神ご自身が大切に思われているすべてのいのち
たい おも ところ ゆた そうぞうりよく も はいりよ
に対する思いやりの心、豊かな想像力を持った配慮を、わたしたち
もと
に求めています。

こんなん じき きょうかいきょうどうたい きょうだいしまい
この困難な時期、教会共同体においてつながっている兄弟姉妹に
おも は なか いっち まね
思いを馳せ、そのつながりの中でわたしたちは一致へと招かれていること
おも お からだ ぼうぎよ かべ ところ かべ
をあらためて思い起こしましょう。そして体の防御の壁が心の「壁」
かみ あい
になってしまわないように、神が愛されるすべてのいのちへと、わたしたち
ところ おも は
の心の思いを馳せましょう。